様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：７２６８１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２００６２

研究課題名（和文）白隠の教判思想の研究

研究課題名（英文）Research on the classification of the various Buddhist texts by Hakuin

研究代表者
堀内　伸二（HORIUCHI, Shinji）

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・研究員

研究者番号：２０２７１５０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,600,000円、（間接経費）　1,080,000円

研究成果の概要（和文）：「教外別伝」の語が表面的に浅く理解され、白隠に代表される臨済禅が、教相を軽視しているかのごとき誤解を招いている状況がまま見られるが、これまで知られることがほとんど無かった白隠直筆の書画や経典に対する注釈書、また、直弟子・東嶺の『宗門無尽灯論』を研究することによって、白隠やその直弟子は教相を非常に重んじ、経文を身に読めない禅師を非難さえしていることがわかった。その結果、これまで行われてきた教相を軽視するような「教外別伝」の表層的な理解の修正が必要であること、白隠の書画や『法華経』の注釈を中心に白隠の教相論を研究した結果、白隠が、道元以上に『法華経』を重視していたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The technical term 'kyoge-betsuden'(transmission of doctrines without dependence upon sutras or other works) is used to express the strong point of Rinzai-shu, but the term is greatly misunderstood in a way that Hakuin is thought to have made light of Buddhist scriptures. On the contrary, a research on Shumon-mujintoron by Hakuin's disciple, Torei, and Hakuin's little known work of paintings, calligraphy and notes on the Saddharma-pundarika-sutra, reveal how Hakuin and his disciple held the Buddhist scriptures in high esteem. For this reason the misunderstanding of the technical term 'kyoge-betsuden' that Rinzai-shu slights the Buddhist scriptures should be amended.

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学

キーワード：白隠　教判　臨済禅　法華経　書画　東嶺　教外別伝　天台

１．研究開始当初の背景

白隠には、何らかの形ですでに公にされている著書の他に、その存在すらほとんど知られていない注釈書が複数存在している。幸いに研究代表者は、縁あって、白隠が住職をし涅槃を迎えた寺である松蔭寺の前住職（松蔭寺前管長）のご厚意によって、その何点かに接する機会を得た。その一つが、『法華経』に対して、版本の行間や欄外に綿密に細注が施された白隠禅師の直筆本である。

研究代表者は、この書物の研究のため「白隠直筆『法華経細註』の研究」を申請し、平成１３年度より平成１６年度まで日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究（Ｃ）（２）（課題番号１３６１００２５）の交付（総額３，６００千円）を受けることを得た。その結果、同本における注釈は、教家顔負けの綿密なる教相理解が前提されていることを知り得た。しかし、『法華経細註』１０巻のデータベース化は、行間と欄外とに細かく書かれた註釈の解読の困難さのためなかなかはかどらず、その内容の検討は不十分なものに終わっている。

研究代表者は、この研究による知見と、それに先行する書画の研究から得られた業績とから、白隠の教判思想を究明することの必要性を強く感じていた。

２．研究の目的

（１）日本における数多くの禅僧の中で、臨済宗中興の祖と讃えられ、また今日の臨済宗諸派が皆その流れを汲んでいると言われる白隠慧鶴（A.D.1685-1768）の思想を明らかにすることを最終目的とし、本研究は、白隠の生涯において最も大きな影響を与えた経典である『法華経』を中心に、教判論がよく表れている『法華経細註』と書画を対象として「白隠の教判思想」を研究しようと考えた。

（２）そもそも白隠の思想全般に関する学術的研究は、まだ緒に就いたばかりで、曹洞宗の開祖・道元に比べ非常に遅れている。

白隠の高弟・東嶺円慈（A.D.1721-1792）が書き残した伝記によれば、８０年にわたる白隠の生涯は、ひたすら修行に打ち込んだ前半生と、悟りに裏打ちされた弟子の育成と民衆教化を主として行った後半生とに分けられる。この後半生において白隠は、（ａ）多くの著作を著しており、白隠の思想研究を行うためには、それらの著作が第一次資料となる。同時に、白隠には、これらの著述に加えて（ｂ）『法華経』や『維摩経』という主要大乗経典の版本に直接墨で書き込んだ注釈書が残されており、更に（ｃ）弟子の育成と民衆教化の為に、実に２０００点とも３０００点とも言われる膨大な書と画が残されている。

これらに関する学術的研究状況は、上記（ａ）の著作として、『槐安国語』（1750 年）に代表される漢文で書かれた専門的著書から、『遠羅天釜』（1751 年）や『おたふく女郎粉引歌』（1760 年）など、より民衆が親しみやすい和文で書かれた仮名書き法語に至るまで多くの著作があるが、訳注のレベルでいえば、たとえば主著の一つである『槐安国語』の訓注が、平成１５年１１月になってようやく出版されるに至ったこと、また『遠羅天釜』など比較的よく知られ、すでに注釈を加えた一般向け書物が出版されているものについても、校訂作業のレベルでは、異本の存在（永青文庫など）が明識されぬまま放置されていること、などに見られるように、思想研究を行なうための基礎的研究をはじめ、なされるべき学術的研究が多く残されている。

（３）しかし、これらはまだ研究や出版がなされているだけ良い方で、（ｂ）に至っては、その存在すらほとんど認知されておらず、従って全く手つかずのままである。その代表的なものが、今日、松蔭寺に保存されている『法華経細註』である。白隠は、若い時『法華経』に接するが、最初は因縁や比喩が多い法華経は取るに足らない経典であると、その価値を認めなかった。しかし、正受老人の指導を受

け大悟した白隠は、『法華経』の真価に目覚め、それ以後は『碧巌録』等の禅籍に並び、『法華経』を度々講じている。そしてこれら一連の講義と相まってなされた『法華経』に対する綿密な注釈が、『法華経細註』である。教家顔負けの綿密さをもって経典に書き込まれたこの種の注釈書は、「教外別伝、不立文字」の標榜をもって知られる禅宗においては、非常に稀なものであり、その研究は、白隠の教判論を知り「教外別伝、不立文字」の真意を再考する上において極めて重要なものである。

（４）また（ｃ）の書画については、研究代表者自身、当初は、ほんの数点に関し、わずかにその存在を知り得ていたのみで、それが持つ意義については、全く無知であった。ところが、『法華経細註』の研究途上、白隠が涅槃を迎えた松蔭寺のご住職より、親しくお話を伺うことができ、白隠には、専門的修行者に書き与えたものから無学の在俗の民衆に与えたものまで、その数、およそ２０００点（真作数）にも及ぶ膨大な書画が残されていること、また書画の主なものの所在、研究状況、更に書画の持つ思想的意味などについて重要な教示を得ることができた。

（５）本研究は、上記の認識のもと、これらほとんど知られていない諸資料をもとに、白隠の教判思想を究明しようとするものである。

３．研究の方法

（１）研究目的達成のためには、まず研究対象となる『法華経細註』と書画の資料収集および整理を行う必要がある。『法華経細註』については、資料の収集はほぼ済んでいるが、書画については、資料の所在自体が明確でないため、識者の教示を受けながら、その収集と整理を行いたい。その上で、収集した資料の解読、研究を行い、最終的に白隠の教判思想を明らかにしたい。

（２）『法華経細註』については、全１０巻からなる『法華経細註』についてこれまで行ってきたようにデータベース化を行う。白隠の手書きによる注釈は、刊本の行間に隙間なく書き入れられているため、経典と注釈部分との対応をつけながら、古文書特有の書体を判読しつつデータベース化を行なう必要があるが、書き込みは、墨色を異にしつつ数度にわたってなされているため、白黒のコピー本では、それが判然とせず、また印刷範囲などの関係で、一部が欠けていたり不鮮明である場合があるため、専門家の指導も受けながら行っていく。その上で、中国、日本の多くの法華経注釈書や禅籍などが引用されているので、引用文献ならびに引用箇所についての註を作っていきたい。

（３）もう一つの資料である書画については、まず書画に関する基礎資料の収集を行う。当該の研究の完成度を高めるためには、世界に存在する書画の所在を明らかにすることが望まれるし、白隠の思想研究においては、いずれは誰かが、その作業を行う必要があると考えるが、落款や書体、冠帽印などによる真贋の判別を行いつつ、全容の解明をすることは、それ自体、一大研究であり、とても短期間で叶うことではない。そこで、次善の策として、この方面において先駆的仕事を行っている方の助言も得ながら、主立った資料に冠して、絵に添えられた画賛や書の内容の読み解きと、そこに盛られている教判思想を明らかにしたい。

（４）上記の研究を踏まえ、できる限り、白隠の教判思想を明らかにすると同時に、臨済禅の特徴を表す「教外別伝」の意味するところを明らかにしたい。

４．研究成果

（１）「教外別伝」を標榜する臨済宗の中興の祖である白隠禅師に、これまで知られてこなかった直筆の『法華経細註』や『維摩経』に対する注記が残されている事実が判明したこと自体が、これまでの白隠禅師の経典観を知る上でまず注目される。

（２）白隠の『法華経細註』には、いわゆる「教外別伝」の語によって誤認されがちな教相の軽視という事実は見られない。それどころか、たとえば仏教用語の正確な理解に不可欠な『倶舎論』が度々引用され注釈が綿密になされている事実や、また先行する法華経の注釈書からの丹念な引用からも明らかにように、教相の重視は、教相家に勝るとも劣らないものがある。

（３）先行する教判論のなかでは、天台の教相論が重視されている。このことは、白隠の書画において、数少ない禅宗以外の仏道者の手になる著作の中で天台の円頓章がそのまま書き記した書が複数残されていることによって傍証される。またこの事実は、白隠の高弟である東嶺が、死を覚悟してまとめ上げ、白隠がその書が後世の残ることを認めた『宗門之無尽灯論』が、天台の教相論を前提にして書かれていることによっても傍証される。同書には、中国の有名な華厳宗の仏道者がなした『華厳経』に対する注釈を取り上げ、悟道の事実から、その注釈が誤りであることを指摘している事例があり、また、「教外別伝」を標榜し、経文が身読できない禅者を批判している表現すら見られる。

（４）白隠の書画の中で最も多い題材は、「達磨図」と「観音図」である。この両者は、仏道者の生涯を端的に示す自行と化他をそれぞれ象徴するものであるが、後者に添えられている賛で多く見られるのは、『法華経』の「観音菩薩普門品」からの引用（もっとも一字だけ、あえて変えてあるが）である。東嶺が伝える確かな白隠の伝記から、特に晩年において複数回『法華経』が講ぜられたことが知られるが、同経に対する綿密な細註の存在、また書画に日蓮正宗系の髭題目だけを記した一行書が複数残されていることなどから、白隠が『法華経』を大変重んじていたことが知られる。それは、曹洞宗の開祖・道元禅師が「法華転法華」なる著作をはじめ、法華を重んじていた事実に匹敵する、あるいはそれ以上のものがあり、これまでの、いわゆる「教外別伝」の浅薄な理解から生じる臨済禅における教相観の修正を強く迫るものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
１．<u>堀内伸二</u>「経典を読むとは？－宗学と仏教学との埒」（『奥田聖應先生頌寿記念　インド学仏教学論集』（査読　無、２０１４年、１１２８－１１３９頁）

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　１件）
１．<u>堀内伸二</u>、末木文美士、下田正弘他『仏教事典』（２０１４年、朝倉書店）２６９－２７５、４９５－５０１、５４１－５４９頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
堀内　伸二　（HORIUCHI, Shinji）
公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・研究員
研究者番号：２０２７１５０４

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：